

30数基の神輿、4,000人の担ぎ手、そして大勢の観客。寒河江まつり「神輿の祭典」が三本締めの場合で終了した。老若男女が大粒の涙を流しながら抱き合い、皆で力をあわせて精いっぱい渡御した充実感と達成感に浸りながらの万歳三唱。9月の夜空に汗が水蒸気となり、輝きながら舞い上がっていく光景を私は毎年見てきた。

「神輿」とは何だろう？何百キロもある神輿を汗だくになりながら、なぜ皆は担ぐのだろうか。神様が乗る「輿」だから？23年間、神輿の祭典を開催してきたが、完全には分からない。1人の力には限界がある。それが1人から2人、2人から3人と人々が集まり、そして数十人が一つになり神輿を担ぎ、神輿のバランス、前後左右に気を配りながら、苦しんでいる人がいれば声を掛け、また苦しい自分と闘いながら大きな声を出して調子を取る。集団の中にリーダーが生まれ、全体を掌握する。神輿が跳ねる。房が大きく揺れる。神輿と人間の一体感はいつ見ても光り輝くものがある。苦しい時の観衆からの拍手は、担ぎ手に活力を与え、皆が笑顔になっていくのである。これはまさに、現代にはない「神様の仕業」だと考える。

23年前、私が社団法人寒河江青年会議所企画室委員長を務めていた時に、寒河江まつりのイベント企画立案を検討した。何故、神輿だったのか。昭和55年、商工会青年部時代、はんでんを買う予算が無かったため、寒河江の酒蔵3社からなる寒河江名醸会からはんでんをいただいた。その御礼として、寒河江まつりの仮装行列で、酒樽を3本組み元気良く担いだことが私の頭の片隅にあった。また、寒河江青年会議所と姉妹青年会議所である神奈川県寒川青年会議所との交流の中で、とてつもなく大きな神輿祭りである暁の祭典「瀆降祭」の存在を聞いた。由緒



2004年 寒河江まつり「神輿の祭典」の様子

ある寒河江八幡宮の「六角神輿」の担ぎ手が年々少なくなっていることから、神輿を中心とした本物の祭りを作ろうと決意し、第1回「熱狂裸神輿」が誕生した。日東ベスト(当時は日東食品株) 駅前商店街、寒河江名醸会、(社)寒河江青年会議所の4基が初陣、篝火を焚き、禊をかけ、フィナーレで禊を奪い取った団体が翌年、六角神輿を渡御することにした。第2回は、大石田町の大桂成人神輿、寒川町役場神輿愛好会の100人の担ぎ手が白木造りの本神輿とともに鮮烈に登場した。このことが、我々の心に火を付け、寒河江神輿祭りイベント拡大にむけ、

バリューサイト VALUE SIGHT

「市民力による街づくり・夢おこし」 ～神輿とコミュニティーの調和～

近年、都市化や社会構造の変化などにより、地域住民の連帯感が薄れ、地域ならではの生活や文化が崩壊の危機に面している。そんな中、寒河江市有志によって始められた寒河江まつり「神輿の祭典」は、今や東北を代表する神輿祭りとなり、地域の活性化に一役買っている。神輿の何がそんなにも人々の心を熱くさせるのか。老若男女の心が一つになるイベントに注目した。

さらに力を注ぎ始めた。第3回には六角神輿を渡御する寒河江料理飲食店組合が「寒河江八幡宮八幡會」を結成。子供神輿や企業神輿も参入し、参加数は19団体にまで増加した。第6回(昭和63年)には(社)寒河江青年会議所が20周年事業として本神輿を建造し、新たに「寒青會」が誕生した。この時から、地域で「神輿」を作ろうとする気運が高まった感じがする。市の地域活性化を図るためのコミュニティー資金(半額助成)の存在を知り、寒河江市3番目の神輿団体として「南部粋龍會」が誕生、翌年、有志が出資して「陵友睦會」が誕生、平成元年には(社)寒河江青年会議所による「寒河江神輿會」が結成され、創世記時代から試行錯誤の時代に入り、渡御コース、渡御時間、演出方法等の検討に入った。企

画運営は神輿を担ぐ人たち、すなわち「寒河江神輿會」でやろうと(社)寒河江青年会議所と話し合い、4年間の猶予期間をいただき、第15回「神輿の祭典」から(社)寒河江青年会議所との共同運営をやめ、自主運営に入った。事務所も無く、少ない予算の中、各団体から出向して頂いた理事と連日連夜の企画書作り、備品の準備、そして警備体制のプランニング。各自の仕事が終わった後に事務所に駆けつけ、徹夜で作業を行い、また翌朝出勤していく人の姿もあった。彼等は、楽しい「神輿の祭典」にしたい、仲間が最高の渡御が出来る「神輿の祭典」にしたいとい

に地域ボランティア活動の一環として4,000人による一斉清掃作業を毎年行っている。

神輿を通じて、地域間の交流が盛んとなった。前出の姉妹都市である神奈川県寒川町の「濱降祭」、東京都台東区の「三社祭り」「鳥越祭り」、宮城県の「鳴子祭り」「青葉祭り」、そして県内の「天童祭り」、寒河江神輿會が中心となり、各団体と交流できる場が数10ヵ所もある。友情が生まれ、祭りの時期には互いに行き来をしている。

寒河江市の人口の約1割が神輿會会員である。飲食店はもちろんのこと、呉服屋、酒屋、旅館業等の神輿祭りにおける経済効果は絶大である。我々神輿會も祭りで使用するものは、できる限り地元で購入し、経済効果が促進するように努めている。昨年、寒河江の拠点である駅前整備事業もほぼ終了し、待望の神輿會館が完成した。4基の神輿を展示、神輿の祭典のフィナーレ会場として活用している。寒河江神輿會は市の活性化のため「緑化フェアinさがえ」での渡御や、記念事業渡御等を行い、寒河江神輿が市民総参加の祭りとなることを目指し、日々邁進している。

8年後の9月15日は、ハッピーマンデー(土・日・月)と重なる。“大祭!寒河江まつり「神輿の祭典」”を盛大に行うと同時に「全国神輿サミット」を開催することで神輿ネットワークを構築、日本有数のビッグな神輿祭りにするのが私の夢である。

元気な街・寒河江!楽しい街・寒河江!明るい街・寒河江!神輿祭りを通じ「日本一のさくらんぼの里・寒河江」、そして「元気な神輿の街・寒河江」を全国にPRしていきたい。

2005年9月15日(木曜)は是非、寒河江まつり「神輿の祭典」にお越しください。私たちの熱い思いを感じていただけたら幸いです。

感謝 孫兵衛

村山



寒河江神輿會
會長

安孫子孫兵衛

う熱い思いに溢れていた。

毎年、終了後に開催されるなおいの会で、理事スタッフが涙を流し、健闘をたたえあう光景を見るのは會長冥利に尽きる。私は、寒河江神輿會運営に当たりながら、年齢や性格の違う理事10数名に、存在感を發揮できる場と、やって良かったという充実感を味わうことができるよう「夢(ロマン)」を与え続けた。

神輿祭りの将来を担う各団体の會長を集め「21世紀プロジェクト」作り、将来のビジョンを語り合い、提言書「粹に舞う」を作成、寒河江市の未来を担う若者たちと積極的に交流を図り、祭りのルーツや神輿について話し合うことで、若者たちの考えを祭りに反映しようと必死であった。また、20周年記念事業として、記念誌「おらだの祭り」を発刊した。他

安孫子 孫兵衛 (あびこ・まごべえ)

寒河江神輿會 會長。

こうじ屋孫兵衛商店(セブンイレブン寒河江日田店)代表。

昭和24年11月19日生まれ。

昭和58年、寒河江青年会議所担当委員長時代に第1回寒河江まつり「神輿の祭典」開催。平成元年、寒河江神輿會副會長就任、平成9年より同會會長。

事務局

〒991-0031 寒河江市本町2-8-3 フローラSAGAE 5 階

TEL 0237-85-6052・FAX 0237-85-6050

<http://www.sagaemikoshi.net/>